

部 長 采女 隆一（桃陵中）
研究主任 伊木 智哉（岩崎中）
部 員 数 34名

1 研究主題

自己指導能力の育成を目指して

－生徒指導の3機能を生かした小牧市の実践を通して－

2 はじめに

小牧市は、東名、名神、中央、名古屋高速などの高速道路が通り、交通の要衝である。内陸工業都市や物流拠点都市として発展してきた本市では、卸売・小売業もさかんで、生産額・販売額ともに県下有数である。他にも、織田信長が初めて築城し、その後、豊臣秀吉と徳川家康の唯一の直接対決である「小牧・長久手の戦い」の舞台となった歴史をもつ小牧山がある。中心部には歴史の名残とともに商業施設が多く、西部には他市町とつながるトラックターミナルや倉庫群などの物流施設が集まり、東部はニュータウンでの少子高齢化が進んでいる。市内には16の小学校と9の中学校があり、どの学校でも「学び合う学び」を取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行っている。

3 研究のねらい

本市では、小中学校25校で約12,700名の児童生徒が、落ち着いた雰囲気ですべて日々学校生活を送っている。しかし、近年、児童生徒数の減少、高度情報化社会、外国人労働者世帯や欠損家庭の増加など、児童生徒の生活環境はあわただしく変化を続けている。そのような中で、スマートフォンやゲームなどの通信機器でしか人と関われない児童生徒、幼少期に親から十分な愛を注がれずに育った児童生徒など様々な背景をもった児童生徒も存在する。また、外国人労働者の世帯も増えてきており、外国人児童生徒の数も愛知県の中でも上位となっている。様々な事情で、特定の子としか付き合えない児童生徒、集団生活をしていく中で問題を起こしてしまう児童生徒などはどの学校にも見られる。

さらに、全国学力学習状況調査の結果を見ても、愛知県全体の傾向と比べて、例年、自己存在感や自己肯定感が低い児童生徒の割合が高い傾向（特に中学生年代において）が見られる。このような状況から、様々な場面で適切に判断し、行動できる自己指導能力を育成したいと考える。

4 研究仮説

（1）研究仮説

学習指導要領の総則（文部科学省、平成29年3月）によると、「各学校においては、生徒指導が、一人一人の生徒の健全な成長を促し、生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義をふまえ、学校の教育活動全体を通じ、学習指導と関連付けながら、その一層の充実を図っていくことが必要である。」と記されている。

また、生徒指導提要（文部科学省、平成22年3月）には、「生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すものです。そのために、日々の教育活動においては、①自己存在感を与えること、②共感的な人間関係を育成すること、③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助することの3点に特に留意することが求められています。」と記されている。

本市の児童生徒は前述のように、自己存在感や自己肯定感が低い傾向がある。一方で、友人や地域との関わりを大切に感じ、協力して学習課題を解決したり、地域行事への参加や貢献を積極的に行いたいと考えたりする意識は高いことがアンケート結果から分かっている。さらには、本市で実践されている「学び合う学び」を中心に、お互いの考えをしっかりと聞き合い、理解しようとする態

度が育ってきている。そこで、生徒指導の3機能を生かして、児童生徒一人一人に集団の一員としての自覚や喜び、連帯感を味わわせ、集団に貢献できるような活動を行えば、自己理解や自己受容が深まり、自己指導能力を育成することができるのではないかと考え、具体的な活動を以下のように位置づけた。

生徒指導の3機能	具体的な活動
①自己存在感を与えるために	<ul style="list-style-type: none"> ・居場所をつくる支援 ・児童生徒の良さや個性を認める支援
②共感的な人間関係を育てるために	<ul style="list-style-type: none"> ・よりよい人間関係を育てる支援 ・集団への連帯意識を高める支援
③自己決定の場を与えるために	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら選択できる場を与える支援 ・主体的に活動ができる支援

(2) 研究仮説のモデル

児童生徒の自己指導能力の育成

その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて、決めて、実行することができる。



- ① 自己存在感を与える活動 (居場所づくり、個性を認める)
- ② 共感的な人間関係を育てる活動 (よりよい人間関係、連帯意識)
- ③ 自己決定の場を与える活動 (自ら選択できる場、主体的な活動)

5 研究の方法

本市では、各学校で同じ校務分掌を担当する教員が集まり、自校の教育計画や日頃の教育実践を持ち寄り、紹介・検討する教育研究会が、原則として毎月第2火曜日に開かれている。その一つである生徒指導教育研究会では、各学校の生徒指導担当者らが集まり、各学校での取組を持ち寄っている。研究にあたり、各校の教育活動において、上記の①②③のどの視点について重点的に指導できるのかを明確にした上で、その取組の様子について、レポートにまとめ、月に1度の教育研究会で検討した。指導の内容や方法について、どのような成果や課題があったのかなど、児童生徒の活動の様子やもたらされた影響について、質疑応答を行いながら考察した。そして、それぞれの実践報告で出された取組やその目的、教師の姿勢、児童生徒へのアプローチが、児童生徒の心にどのような変化を与えたのかを検証し、その結果をまとめた。



6 研究の実際

(1) 自己存在感を与える活動

実践例①

学び合う学びの授業	小牧市立A小学校	対象学年：小学2～6年生
ねらい	授業の場で児童に居場所をつくる。	
活動内容	<p>級友と関わる機会を増やし、互いに認め合う授業を作るために、座席をコの字型で配置をする。また級友の「分からない」に向き合い、協働していく姿勢を育てることで、共に成長していこうとする姿勢を育てる。3～4人のグループ活動を多く取り入れ、「分からないから教えて」と言いやすい雰囲気をつくり、一緒に考えるようにする。考え方がいくつも出てくるような課題を出し、自分と違う考えをもつ級友のことを認め、自分の考えを広げさせる授業展開にする。</p>	
	<p>考察</p> <p>自分と違う考えを認めたり、つまづいている級友を支えたりすることで、互いの考えを認め合い、支え合う人間関係をつくることができた。普段から困ったことがあると友人の考えも借りて解釈しようとする様子が多く見られ、児童が安心して学ぶ場とすることができた。</p>	
		

実践例②

幼稚園訪問（総合的な学習の時間）	小牧市立B中学校	対象学年：中学3年生
ねらい	生徒がお互いの良さを見つけ、個性を認め合う。	
活動内容	<p>年間3回（6月、10月、3月）、学校の近くにある幼稚園と交流する場を設定することで、思いやりの気持ちを育てる。園児の工作の手伝いや一緒に歌をうたう、外で遊ぶなど、園児とふれあう。また、事前にオリジナルの絵本を生徒が作成し、生徒同士が読み聞かせ練習をして、当日園児に読み聞かせをする。絵本の作成の際には、ストーリーにテーマをもたせて、園児に伝えたいことを明確にさせる。</p> <p>例：友達を大切にしよう、あいさつをしよう、ものを大事にしよう、食べ物の好き嫌いをなくそう、歯磨きをしよう、など</p>	
	<p>考察</p> <p>普段の学校生活で友達とうまく関われない生徒が、積極的に園児に声をかける姿がたくさん見られた。絵本の読み聞かせでは、園児の喜ぶ姿から生徒の達成感・満足感が味わえた生徒が多く見られた。園児と関わる友達の普段とは違う姿を見て、互いの良さを見つけ、認め合うことができた。</p>	
		

(2) 共感的な人間関係を育てる活動

実践例③

しつけカルタ	小牧市立C小学校	対象学年：全学年
ねらい	よりよい人間関係を育て、望ましい態度や行動の在り方を学ぶ。	
活動内容	考察	
<p>格言・ことわざカルタを使ったカルタ取りをする。2学期から練習をスタートし、冬休みは家庭でも取り組ませる。3学期の学校公開日で親子カルタ大会を実施する。昭和58年から始まり、昔から取り組んでいる歴史ある行事なので、保護者にも浸透している。各学級で練習する際には、グループでリーダーを決めたり、学級でリーダーを決めたりして、友達との関わりを大切にする。</p> <p>例：「親しきなかにも 礼儀あり」「正直は 一生の宝」 「己を責めて 人を責めるな」「継続は 力なり」</p>	<p>普段は静かな児童でもカルタを通して、楽しく友達と関わりより人間関係を築くことができた。「しつけカルタ」で覚えた言葉を、普段の生活で生かし、児童同士で声をかけ合う姿が見られた。集団の一員として望ましい態度や行動が増えた。</p>	
		

実践例④

縦割りブロック	小牧市立D中学校	対象学年：全学年
ねらい	集団としての連帯意識を高め、異学年の生徒同士が協力し合い、互いに認め合う。	
活動内容	考察	
<p>【応援合戦】3学年のブロック応援（7月～9月） 7月から、応援スタッフ（3学年で8名以内）や応援団（10人以内）を結成し、応援合戦を創りあげていく。夏休みに行く練習から、3学年のスタッフが中心となって、振り付けを考え、後輩に教える。</p> <p>【合唱祭】ブロック交流会（9月～10月） 同じブロックの学級と合唱交流を行う。3年生は、先輩としてのプライドを合唱を通して伝える。また、後輩へのアドバイスをする。</p> <p>【卒業生を送る会】（1月～2月） お世話になった3年生に、感謝の気持ちを伝えるために、体育大会の応援合戦をショートバージョンにアレンジする。これまでは、先輩に教わる立場だった2年生が中心となって計画・練習する。</p>	<p>学年や学級の枠を越えて、継続して縦割り活動を行うことで、一人一人が輝く場を作ることができた。異学年の仲間と練習を重ねていく中で、集団への帰属意識や連帯感が高まり、仲間のよさを理解することができた。約8か月間という長期に渡り、縦割り活動を行うことで、上級生としての自覚が随所に見られるようになった。</p>	
		

(3) 自己決定の場を与える活動

実践例⑤

なかよしタイム	小牧市立E小学校	対象学年：全学年
ねらい	異学年との交流から、自分で考え決定する場をつくる。	
活動内容	<p>異学年でペア学級（1年6年・2年4年・3年5年）となって仲を深め、学校生活をよりよいものにするという活動を行う。始めの「顔合わせ」から年間約5回の交流を行う。室内でのレクリエーションを通しての交流、本を選んでペアの読み聞かせ交流、運動場で外遊びの交流、学校行事と連携して行う期間もある。適宜各クラスでの交流をしている学級などもある。各クラス児童たちに交流内容を考えさせ、クラス全員で活動内容を決定している。その中でペア学級の子に向けて、どんな事をするのかなどは、個人で考えて準備させていく。</p>	
考察	<p>高学年の児童は責任感をもち活動することができた。低学年の児童は通学団以外の上級学年の児童との関わりをもつことができた。年間を通して活動するので、ペア学級の子の事を配慮し、活動を行う際の準備などを自分たちで考えて、決定していくことができた。（読み聞かせ・名刺交換など）</p>	



実践例⑥

生活・週訓チェック あいさつ運動	小牧市立F中学校	対象学年：全学年（生活委員会）
ねらい	よりよい学校生活の向上を考え、主体的に活動する。	
活動内容	<p>身なりや時間、礼儀、移動、戸締まりについて、生活委員から見て、できているかできていないかのチェックをする。週訓（生活目標）を決め、1週間の生活について呼びかけをする。</p> <p>あいさつを「笑顔で」してほしいという思いから「笑顔でニコニコあいさつキャンペーン」を考え実行した。委員会でも人の目を見て笑顔であいさつするよう心がけた。生活委員が昇降口に立って、学年間わずあいさつをする。このような活動について生活委員会を中心に話し合い、よりよい学校生活をするために、どのような活動内容にするのか自分たちで決めていった。</p>	
考察	<p>自分たちで決めた取組に対して主体的に活動を行うことができ、自分たちの生活を自らが見直すようになった。どうしたら元気なあいさつができるのかなど、生徒自身が考えられるようになり、よりよい学校生活を送るために、何事に対しても自分たちで考え、決めていこうとする態度が定着してきた。</p>	



生活委員会 生活・週訓チェックシート		月					日	時
担当氏名		1	2	3	4	5	6	
挨拶	礼儀作法、身だしなみ、挨拶の仕方、笑顔の大切さ							
時間	授業時間、休憩時間、放課後の過ごし方							
移動	校舎内での移動、校門出入り、通学路の安全確認							
戸締り	教室の戸締り、校舎の戸締り							
清掃	教室の清掃、校舎の清掃、校庭の清掃							
安全	防火安全、交通安全、防災訓練							
健康	食生活、運動、健康診断							
その他	生活委員による学校の評価							

7 おわりに

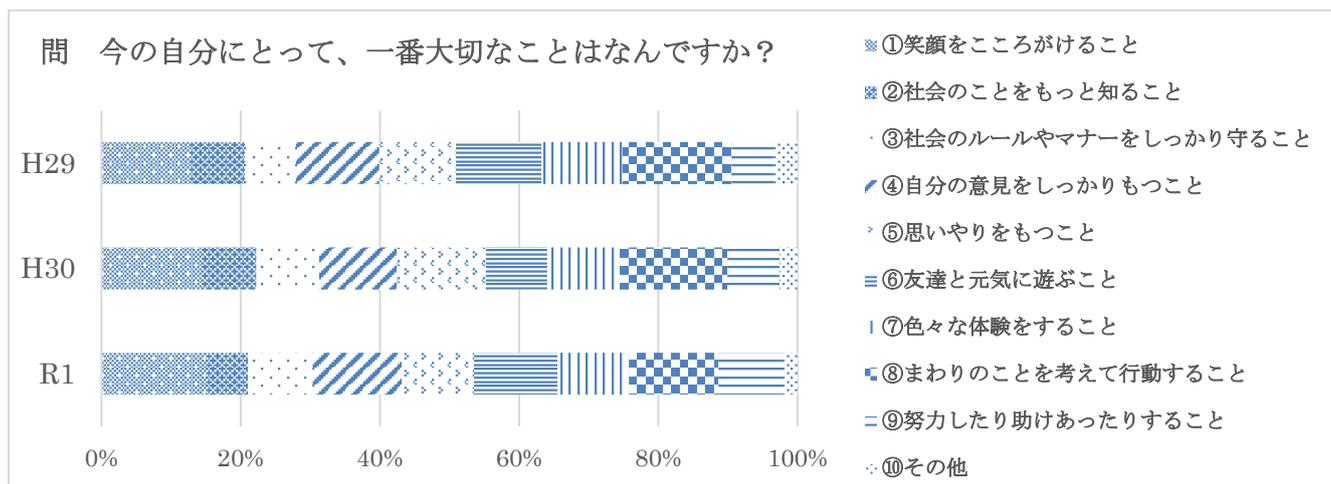
A小学校、B中学校の実践より、教室が居場所となり、互いの良さを認め合うことから自己存在感を与える支援ができた。また、C小学校、D中学校の実践より、集団としての連帯意識が高まり、望ましい態度や行動を学んだことから共感的な人間関係をつくる支援ができた。さらに、E小学校、F中学校の実践より、児童生徒に主体的に活動させることにより、自己決定の場を与える支援ができた。

今回紹介した6つの実践例の他にも、多くの実践例が報告された。それぞれの活動を通して、消極的な生徒指導（対処療法的な生徒指導）ではなく、生徒指導の3機能の具体的な活動をさせることにより、積極的な生徒指導（予防的な生徒指導）をすることができた。どの活動においても、教員の働きかけ次第で児童生徒の成長が大きく変わってくるのが分かった。今後の課題としては、次のようなことが考えられる。

【今後の課題】

- ・ 活動のねらいや目的をより明確化させることにより、児童生徒に目的意識をもたせ活動させること。
- ・ どの活動においても、目標に対して自分のふり返しをする機会を設け、次の活動につなげさせること。
- ・ 児童生徒同士のよいところやがんばりを見つけさせ、評価し合う場を増やしていくこと。

また、小牧市少年センターによる市内の小学5年生、中学2年生を対象に実施した「少年の生活意識と行動」の実態調査（令和2年3月）によると、次のアンケート結果が得られた。



	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
H29	12.45	7.63	7.13	11.65	10.74	11.95	11.35	15.26	5.92	3.31
H30	13.99	7.78	8.83	10.94	12.51	8.62	10.20	15.14	7.36	2.52
R元	14.72	6.02	9.13	12.57	10.20	11.82	10.10	12.67	9.24	1.93

経年変化を見てみると、「①笑顔を中心がけること」、「⑨努力したり助けあったりすること」は年々増加傾向にある。この結果から、自己存在感を感じたり、共感的な人間関係をつくったりすることができるようになっていと考えられる。また、令和元年度の結果では「④自分の意見をしっかりもつこと」、「⑧まわりのことを考えて行動すること」の割合が高く、多くの児童生徒が自分の意見を持ち、考えて行動することの大切さを感じていることが分かる。これらの結果から、児童生徒たちは、その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて、決めて、実行することができるようになりつつあると考えられる。

小牧市の小中学校では、問題行動や不登校問題など、まだまだ多くの生徒指導の諸問題を抱えている。しかし、小学校、中学校、高等学校、教育委員会、少年センター、適応指導教室などが協力・連携をし、小牧市が一つになって、子どもたちの健やかで豊かな未来について考えている。今後も、各学校において、あらゆる教育活動を通して自己指導能力の育成を目指していきたい。